

編集後記

周知のように曾我量深先生は、去る六月二十日ご往生の素懷を遂げられました。思えば、「親鸞教学」は「曾我量深先生によって命名され、金子大栄先生の呼応して立たれたところから出発した」(第二号後記)のであるが、今謂わばその産みの親を失ったのである。本誌が生まれてから既に十年、誌は動乱の歴史を貫いて所期の目的、即ち親鸞教学の主體的解明とその公開を願って歩み続けて来たが、これ程の悲しみに出合ったことは嘗てないであろう。然し静かに思念するとき、法身としての先生の永遠なる生命は、その肉体の死を超えて常に私達に浄土の世界を教説せられている如くである。アミダのいのちに捉えられてそれを見る先生の直観的思索は、真に自由で常に新しいものであった。本誌では、今後事情の許される限り大学院に於ける講義を引続き掲載し、その歴史的創造的な思索の生命に触れたいと念願している。曾我先生を失うという大きな危機に出合った「親鸞教学」ではあるが、しかし「ひとたび生まれたものは、生まれたものの自身の生命を

生きる」(前同)と云われる如く、ここで改めて誌の本来のいのちを確認し、更に飛躍を期したいと念願している。

それにしても、金子大栄先生の論稿「智慧の念仏」は、何返読み返しても味得深い教えであります。称名念仏がどうして往生浄土の行であるか、その道理を具に論述し、更には真宗学の意義にまで言及されております。また、七回にわたって掲載されました安田理深先生の「莊嚴と廻向」は、今回を以て完結しました。先生特有の鋭利にして精緻な思索を初めから精読したいと思います。

学会内からは、藤原先生が聖徳太子一三五〇年忌に因んで、「誕生」の題のもとに、太子と親鸞聖人の深いめぐみの關係を論じて下され、大門先生は『論註』を中心として「ことば」としての名号の問題を、また江上先生は「法然の罪障観」について、それぞれ最近の研究の中から発表して頂きました。また大学院の学生からは、今回は博士課程の広瀬惺君に、これまでの研究成果を纏めて頂きました。また、新しく「親鸞教学」の賛助会員を募っております。有縁の方々のご紹介をお願い致します。

(小野)

昭和46年11月10日 印刷
昭和46年11月20日 発行

親鸞教学 第19号 号 300

京都市北区小山上総町22

大谷大学真宗学会

親鸞教学編集部

発行人 藤原幸章

大谷大学真宗学研究室 振替 京都 0225番

京都市中京区寺町通三条上ル

文栄堂書店

振替 京都 2948番

京都市下京区七条御所ノ内中町50

中村印刷株式会社

電話 (313) - 0468番

編集
発行

発売

印刷